

平治絵巻 六波羅合戦巻詞書の断簡について

—併せて現存三巻の書蹟に及ぶ—

田 村 悦 子

「本願寺内事局」明治二十三年出版の『心画帖』⁽¹⁾と題する一帖があるのを開いてみると、古筆切を著色石版に付したものである。命名は多分、『法言』に「書、心画也」とあるのから出たものであろう。型の如く聖武天皇と伝える大聖武からはじまっていて、手鑑を印刷したものかと思われる。中には、

鳥ノ下絵経 (極め 光明 皇后) —法華経

和泉式部集切 (〳 世尊寺行成卿)

光泉寺切 (〳 最明寺時頼朝臣) —白氏文集

巻物切 (〳 智證大師) —(紙背、文選)

佐保切 (〳 大燈国師) —古文孝経

などの著名の切も見える。万葉集の断簡では、梅尾切 (巻第四、五二七番)と尼崎切 (巻第十二、二八八六番の訓・二八八七番の本文)とがある。また、寂蓮法師と極めのある、鳥や蝶や草花などの美しい下絵があつて、横罫を上部に二本、下部に一本引いた料紙に仮名文をしるし、朱をもつて振仮名と句点を施した五行の切は、見ることまことに稀なものである

平治絵巻六波羅合戦巻詞書の断簡について

が、その文を味わうと梁塵秘抄口伝集かと思われた。但し、この切はすでに「書道全集」一八日本6 平安V・鎌倉I (平凡社昭和三十一年刊)の「梁塵秘抄切」^(久曾神昇氏解説)中にかかげ「日本古典文学大系」73 (岩波書店昭和三十六年刊)志田延義氏校注の「梁塵秘抄」に附載されているのに敬服した。

以上の他に、家隆卿と極めた四行の切がある。その文章は次の如くである(図版V参照)。

「鎌田兵衛申けるは守殿は思食旨

ありてひかせ給也正清ハ御共つかまつる

殿原はしはしふせき箭いてのはしまい

らせよ心さしハ御共におとるへからすといひ」

中に鎌田正清がみえることや、石版刷りながらその筆蹟から、私はこれを平治合戦絵巻の詞書ではないかと感じ、これを検討すると果して東京国立博物館保管の同絵巻六波羅合戦の巻の摸本の詞書(挿図1)に同文を見出したのであつて、その推測のあやまりないことを確かめた。

心画帖は本派本願寺より、明治廿三年及び昭和十四年と、再度にわた

り公刊せられたものであり、炯眼の士はすでに気がつかれていることかとも思うが、最近刊の角川版日本絵巻物全集IX「平治物語絵巻」(昭和三十一年十二月刊)や、日本古典文学大系31「平治物語」(岩波書店昭和三十一年六月刊)をみて、この断簡についてふれるところがないようなので、あえてこゝに図版をかかげ紹介しておきたいと思う。

一

周知の如く、鎌倉時代製作に係る平治絵巻は、三条殿夜討の巻(ボストン美術館蔵)、信西の巻(静嘉堂蔵)、六波羅行幸の巻(東京国立博物館蔵)の三巻が存在する。他に、六波羅合戦の巻の白描摸本、待賢門合戦の巻及び常盤の巻の彩色摸本が伝えられている。又、六波羅合戦の巻については、その原本の絵を奇妙にきりぬき出したもの十四片が存在することが近年わかり、少しく原物についてもしるものが出来たのである。

そして、いま又、この巻の詞書の原本が僅か四行でものこっていたということは、まことによるこぼしく、その意味些少ではなからうと思われる。

六波羅合戦の巻の、摸本によって知られる内容や絵の構図、また原本十四片については、秋山光和氏が詳細に考察記述⁽²⁾されているので、こゝに再び贅言を費す必要もないようであるが、記述の都合上、その巻の各段の内容を略記しておこう。

〔絵一〕

此の絵に対する詞書は失われているが、図は、源氏勢にせめ寄せられた平家の六波羅邸において、(1) 平清盛が討って出ようとし、(2) ついで馬

に乗って、軍勢を率いて源氏勢を追い出す。(3) 更に、門外に走り出て源平の混戦となる。この三情景が描かれており、その左端に、走り向ってくる悪源太義平の勇姿がみえる。

〔詞一〕

右の平氏の出撃にたえかねて、源義朝は西の河原へ退却したが、弱兵には落ちのびることをゆるし、自からはとってかえして死を決して闘おうとする。家来の鎌田正清が一旦東国へ赴いて再挙することをすすめて主従共におちのびる。

〔絵二〕

騎馬或いは徒歩の将士の一群がえがかれていて、これは右の詞書の中、正清が義朝をいさめる箇所に対応するようである。しかし、詞書のその他の部分にあたる絵はみえず、この段は現在の状態ではあまりに短かすぎるので原本ではもっと長かったのかもしれない。

〔詞二〕

義朝につき従って東下しようとする部下に対して、正清が「とどまって防戦して主人義朝の落ちのびる時をかせげ」と命ずる。その言にしたがって、五十余騎力戦して平家の追手をくいとめる。その間、義朝と正清らは退却する。

〔絵三〕

退却する義朝らと、これを追撃する清盛の率いる平家軍とがはじめの部分にえがかれており、後の部分に正清の言にしたがって、防ぎ矢をいて平家をくいとめる義朝の部下と、そのすきに東へ落ちのびる義朝主従がえがかれている。

〔詞三〕

勝ちほこった平家は、敗れた藤原信頼と義朝との邸宅を焼きはらい数十町の大火となった。

〔絵四〕

絵は、右の詞書に対応して、平家の軍勢に押かけられた両邸宅の猛火がえがかれている。

以上解説したような詞三段・絵四段から此の六波羅合戦巻の摸本は成っているが、詞第二の本文は次の如くである(挿図1)。

「鎌田兵衛申けるは守殿ハ思食旨

ありてひかせ給也正清ハ御供つかまつる

殿原はしはしふせき箭いてのはしまい

らせよ心さしは御供におとるへからすといひ

けれハ五十餘騎のこりとまりて矢たね

のあるかきり心をひとつにしてふせきたゝかふ

兩方こゝにておほくうたれにけり」

すなわち、心画帖の切レ四行が六波羅合戦巻の詞書現第二段全七行の初め四行に相当することは明白であって、たまたま、此の一卷の中のクライマックスともいふべき忠士五十余騎が三条河原で死闘して平氏の追

挿図 1 平治絵巻 六波羅合戦巻摸本
詞書第二段

撃をくい止めて、主義朝の退却を援ける段の中である。六波羅合戦巻の詞書は写本しか知られないので、厳密に学問的にはそのテキストの価値が不明だったわけであるが、わずかに四行でも原本の断簡が分り、写本の文とその断簡の文と大体一致したので、これによって、六波羅合戦巻写本の詞書は古い本を内容上はほぼ正しく伝えていることが証明されるわけになったのである。

さきにも挙げた六波羅合戦巻の原本の絵の切抜は(挿図2参照)、此の第三段、すなわち三条河原の防ぎ矢の段において、一番多く六片(正確に六個二片)残っている(全部では十四片である。内第一段四片、第二段二片、第四段二片半)。摸本が製作されて後のいつの頃にか、原本は絵も詞も切られて行ったこと

挿図 2 平治絵巻 六波羅合戦巻摸本絵第三段
三条河原の決戦部分(角川版絵巻物全集による)

であろが、その経過については殆んど知るところがないけれども、絵の残存の多い第三段において、詞書の断片をも見いだしたことは、単に偶然にすぎぬことかどうか、いささか興味な

しとしない。

六波羅合戦巻の絵の奇妙な切出し—画面の全高は竪一尺四寸位であつたはずの原画のところどころを縦五寸六分乃至八分、横四寸九分乃至五寸一分の色紙形に切りこまざっている—は、原画に損傷が甚しかったので此のような切り取りをしたのであらうという推測もあるけれども、いま此の詞書の断片が、四行にすぎないとはいえ、天から地まで完存し、上下にも中間にも別段欠損のないところを見ると、色紙形状切出しについて、この推測にもまだ考慮の余地があるかもしれない。

二

平治絵巻については、巻々の間の絵画に成立年代の相違があるとする見方が近来盛んなようである。すなわち、

- (1) 描かれた武具甲冑の式制等の点からみて、三条殿夜討巻・信西巻の方が古く、六波羅行幸巻の方が新しく、近時残欠の発見された六波羅合戦巻の絵は更に時代が下るとする説⁽³⁾
- (2) 三条殿夜討の巻・信西の巻・六波羅行幸巻の詞書はすべて同一に古いものであるが、絵は夜討・行幸は古いけれども、信西のみは集団人物の描写の規模等から考えて前二巻の古さのものではなく、やや時代がおくれて補われたものとする説⁽⁴⁾

この説では、信西の巻の絵と詞書はその料紙の質が違っていて、時代においても相違が見られるとするのであるが、夙に江戸時代、伊勢の祠官で国学者であった足代弘訓^(一七八四—一八五六)⁽⁵⁾もこの信西巻について、「絵詞は、後に絵巻物をきりて、平治物語の文をかき入れたる物とみえたり。」と観

察した。これは、絵と詞の先後については前の説と正反対であるけれども、絵と詞との間に時代差を認めた点については、この絵巻の研究史上必ずず声を大にして取り上げるべき卓見であらうと思われる。

右にあげた平治絵巻諸巻の絵に時代差ありとする説に対し、私はいま紹介した六波羅合戦巻原本詞書断簡によって書の面からはどのような発言ができるかを考えてみたい。

そこで、まず合戦巻の詞書の摸本と原本との両者の関係は、果して如何であらうか、これを比較対照してみることにしよう^{(図版V・挿) 図1参照}。

(一) 摸本は、行款は原本と同じであるが、しかし仮名の種類が次のように字母の違うものになっていることがまま見られる。

	原 本	摸 本
第一行	累	る
第二行	里	り
第三行	豆	亭
第四行	ハ	支
〃	よ	余

(二) 漢字のくずし方も、例えば、鑑(原) 源(模)、申(原) 一(模) 以上第一行、ん(原) ん(模) 四行の如きは、全く異なる体になっている。そのほか、原本の「せ」(二行)・「共」(四行)が摸本では「伏」・「伏」になっているように別字にかわっている異同さえある。かように、少くも詞書の書体・書風等に関する限り、六波羅合戦巻のいわゆる摸本は原本の書跡の倣は殆どこれを伝えておらず、到底「摸本」とは言えない単なる謄写本に過ぎないことが分つたのである。

このように書の面では、摸本は原本に頗る不忠実であることが知られたため、摸本の詞書のさまによって六波羅合戦巻を三条殿夜討以下原本三巻と対照比較して考察するようなことは全く無意味ということになっ

た。

次に、またこの合戦巻の絵に、短冊形が設けられ文字が記入されていて、原画残片にその短冊形が二個存するのであるけれども、一個の文字は消滅しており、わずかにいま一個の短冊形の文字「清盛」の二字（挿図3）が、「原巻の書体を偲ぶ唯一の資料である」とされている。しかし、一般に画中の短冊形の文字は必ずしも詞書の書と同手とは限らないであろうから、残片の短冊形の文字と原本三巻の書とを比較することは適切とも思えない。

このような状況であるから、絵の比較と共に行なわれなくてはならない詞書の書の面における六波羅合戦巻と三条殿等原本三巻との比較対照の材料は、これまで全然無かったというべきであったところ、いま、僅かに四行とはいえ、此の詞書断簡によってそれが始めて得られたものである。

ところで、六波羅合戦巻詞書の書と三条殿等原本三巻詞書の書とを比較するには、それに先だって、後者三巻の相互の間の関係はどのようなかを見ておかななくてはならない。まず、三条殿夜討巻と信西巻とは、絵が同筆とされているが、詞書の方でも両巻一筆ということが出来

挿図3 六波羅合戦巻残欠
清盛出陣の部分 短冊形文字

ようか（図版Ⅵa・b）。
但し、もう一巻の六波羅行幸巻となると、詞書は、一行の字詰が他の巻に比べてやや多く（もちろん毎行字数不等であるが、平均して言えば、六波羅行幸巻は

一行二〇・三字であるのに、三条殿巻は一行一八・七字、信西巻は一八・六字である）、書体はいさゝか小ぶりで、且つ細身の体をなしている。前記(1)の、三条殿・信西二巻の絵と、六波羅行幸巻の絵とは年代差があるという説に平行して、書の方も差異があるとみたらばちよいどよいのではないかと誘惑されないでもない。けれども又、文字各個各個について比較対照すると、六波羅行幸巻も、三条殿・信西巻と同筆でないと言いきるわけにもゆかないようである。だが、こう漠然とああ思いこう考えていても所詮どうにもならない。一々の文字についての比較を実施してみることにしてしよう。すなわち比較が容易であるように、同一の文字（仮名・漢字）が二巻以上に共通に出る場合の対照を目的とする一覧表を作成して後に掲げる。（二四頁より三一頁の表参照）。

別掲の対照表を観察検討し、殊に表を作成するために手ずから影摹を試みてみて、いささか原本三巻の詞書の筆意を会得した結果、私は、三条殿巻は筆つきが腰がつよくしっかりしていると、信西の巻は肉太であり、行幸巻は細身の体であるとかいう相違感はあるが、あえて異筆と認める理由は今のところ感得できず、三巻すべて同一筆であるとして何らさしつかえないのではないかという考えを持つに至った。文字の形状の相似にとどまらず、私のつたない影写にはあらわし出せなかったけれども、特徴ある顫筆が三巻共いずれも共通することなどは（挿図4）、特に自信を強めさせたのである。

ついで、右のような状況の原本三巻の詞書に、六波羅合戦巻の詞書を代表する、今得られた断簡四行の書を比較対照すると、まず、さきに両巻相同じであろうと言った三条殿巻・信西巻に此の断簡は書風同じく

して一筆であること、ほぼ明瞭であろう。

更に、断簡を六波羅行幸卷詞書に对照して見よう。六波羅合戦卷断簡四行中にある「兵」「思食」「正清」御共の「共」等の字句が行幸卷の詞書にも見えているのを抽出して比較検討すると挿図5・6にみえる如く全くよく似ていることは読者も容易に感知されることであろう。少くとも字形の面において、行幸卷と合戦卷とは一筆であるとして差支えないと思う。

且つ、これを一層確実にするため、断簡の文章を三条殿夜討・信西・行幸の三卷の詞書の中に出る文字を拾って集字構成したものと、原断簡と对照してみると次頁に並べ掲げのように(挿図5・6参照)、ほぼ同様の形状・気分をしめすので、六波羅合戦卷の詞書の書跡も夜討・信西・行幸三卷と同筆であるとみてよからうと考える。

なお、この方法は、梅津次郎氏がさきに、『慶安手鑑』にみえる「彦火々出見尊絵詞」を、同文を「伴大納言絵卷」の文字で集字して对照比較することを試みられたが頗る有益な新方法と思ひ、それに倣ったものである。⁽⁸⁾ なお、平治絵卷の詞書は一般に家隆卿筆と鑑定されたことは、「倭にしき」「住吉家鑑定控」⁽⁹⁾等に見える如くである。此の心画帖の断簡も亦「家隆卿」と注記されている。家隆という個人の比定の当否はいま論外としても、先人の目も此の断簡を平治絵卷他卷の詞書と同一の筆蹟に見たことを知るのである。

要するに、平治絵卷の詞書について、三条殿夜討卷・信西卷・六波羅行幸卷及び六波羅合戦卷、いずれも同一筆とみてさしかえないことが右の比較検討の結果しめし出されたのである。

ところで、詞書と絵との関係について、忘れてならないことは、同一紙に詞と絵と両方かかれたものが、少数ながら平治絵卷には存する点である。⁽¹²⁾ 私は現物をみていないので、いささか心細く思うのであるが、確実な写真によって伺いみると、

三条殿夜討卷
詞書第一段22行

信西卷
詞書第三段3行

六波羅行幸卷
詞書第四段8行

信西卷
詞書第一段1行

六波羅行幸卷
詞書第四段1行

三条殿夜討卷
詞書第一段1行

三条殿夜討卷
詞書第一段21行

六波羅行幸卷
詞書第一段5行

信西卷
詞書第二段2行

六波羅行幸卷
詞書第一段5行

挿図4 現存三卷の書風の対照

(イ) 三条殿夜討の巻の絵の末尾と詞書第二段とは同一紙にかかれてる(図版VI a)。

(ロ) 六波羅行幸巻の詞書第二段と絵第二段の前半とは、同一紙にかかれてる(図版VI c)。

こういう事実がある。さて、初めに記した、絵に時代差があるとする説(1)によると、三条殿夜討の巻の絵と六波羅行幸巻の絵との間には年代差があつて行幸巻の方が新しいとなして⁽¹⁴⁾いる。此の時代差⁽¹⁴⁾があるとされる二種の絵のどちらも私が同一筆とする詞書と同一紙に共存する場合があること、言いかえると、古いと説かれた三条殿の巻の絵も詞書と同紙に併存し、新しいと説かれた六波羅行幸の巻の絵も詞書と同紙に併存し、而もその両方の詞書は一筆の書であることは、どうしても絵に時代差がありとする説と矛盾にならざるをえない⁽¹⁵⁾。私は絵のことは分らないけれども、このように詞書の書の検討からは、少くも三条殿巻と六波羅行幸巻との絵は同時代のものではないかという考えに導かれざるをえない。

この第(1)説に比べて、第(2)説、すなわち三条殿夜討・信西・六波羅行幸の詞書は同一であるが、夜討・行幸の絵は古く信西のみ絵が新しいとする説はどうであらうか。夜討・行幸の二巻に、絵と詞と同一紙に存する場合があるのに比べ、信西巻に限って詞と絵とは全て別紙である。このことは、夜討・行幸の絵は詞書と同時の古い絵であるのに対し、信西の巻は、詞書を切つて残して、新しい絵を補入したと見るのに或いは有利であるかもしれない。

○挿図6の集字の中、若干の文字が遺憾ながら現存三巻中に見い出せないで、或るものは偏傍のみをとつたものもあるし、あるものは断簡の文字をそのまま入れて、その字の脇に墨点を附して区別した。

○集字の各字の出典をしめす表は註13に示した。

注 **「金」偏のみ六I10に取り、「兼」は断簡による。

**「田」は六IV6「雷」よりその部分をとる。

**「竹」は六I7簾・「前」は信I9に取つて合成した。

二

次に文学の面からの観察にうつり、この断簡四行の本文を平治物語の本文―便宜、最近に刊行された日本古典文学大系(岩波版)の平治物語を用いる―と比較対照し、且つまた、いま一段ひろく、断簡以外のすなわち現在摸本⁽¹⁶⁾によって知る部分の六波羅合戦巻詞書についても比較を試みようと思う。大系本が三条殿夜討・信西・六波羅行幸の三巻は対校に用いているけれども、この六波羅合戦の巻には及んでいないので、いささかその欠を補おうと思うのである⁽¹⁷⁾。

まず、断簡四行にほぼ相当すると思われる平治物語の本文を掲げると左の通りである。

(義朝敗北の事)

三條河原にて鎌田といひけるは、「頭殿はおぼしめすむねありておちさせ給ぞ。ふせぎ矢射ばや、人々」といひければ、云々(二三七頁)

両者を比較するとかなりの相違があることが直ちに目に入るが、それについて考えをめぐらしてみよう。

断簡によると、鎌田正清は、義朝につき従う部下が主人と一緒に東国へ落ちようとするのをとどめて、防戦して義朝が落ちのびる時間をつくることをすすめて、「自分は義朝の供をするけれども、あなた方がふみとどまって防戦するところざしは、義朝に供をする忠義に決しておとらない」とさとしている。

これが大系本では簡単に「防戦しよう、皆の者」というだけの一句にとどまっている。断簡のしるす情理ある説諭がみられないのはさびしい

感じがする。

なお、こまかい穿鑿をすると、鎌田の説諭のうち、大系本に『頭殿義朝は考えがあつて「おちさせ給」のである』としるしているところを、断簡本は『頭殿は……「ひかせ給」のである』と書いている。おちさせ給うといえ、離れた遠い所へ落ちのびることであり、義朝としてはその勢力圏である東国を志すのである。それが再挙をはかる一時の方便、すなわち思召す旨あつてであることはいわなくてもわかることであり、又、士卒にいう言葉としては義朝の敗北をそこまではっきりい表わさない方がよい計りごとであろう。これに比べ、考えがあつて引くというのは、ひくは退却という意味にとどまり、ちょうどよくいう「予定の退却」ということにあたるのであるから、この場合の表現としては、ひかせ給ふの方が落ちさせ給ふよりも適切であると評しうるかもしれない。

すすんで断簡以外の部分の摸本六波羅合戦巻の詞書の比較考察に及ぶと、絵巻詞書と平治物語とは殆んど比較のしようもない位、相違しているのであるが、暫くその中から少しだけを取り出して考えてみる。

(1) 断簡の前の段、即ち摸本六波羅合戦巻詞書第一段では、義朝が西の河原へひき退いたが士卒に対して、「自分は死を決してかけ出る」と宣言するように書いてある(「義朝たえずして西の河原へ引しりそきぬ」云々)。しかるに、大系本では、悪源太義平が「河より西へひ」いたので、義朝が「義平が河より西へ引つること、家のきずとおぼゆるぞ」自分は死を決して戦おう、といって駆け出そうとすることになっている。いずれが事実であるか知らないが、一は自分が退却した後、憤然として

また駆け出でようとする事となっており、他は嫡子の退却をいきどおって義朝がかけ出そうとすることになっていて、主客の相違甚しいものがみえる。

既にといった断簡は摸本詞書の第二段に属するものであるが、次の第三段にうつる。第三段は信頼・義朝の敗北の後、二人の家が焼かれることになるのであるが、詞書は次の如くである。

信頼卿の宿所三个所并義朝か六條堀河の家をやきはらふあひた餘炎數十町にをよふ咸陽宮（○咸、原作）の煙のことし

これが平治物語（義朝敗北の事）では次のようになっている。

さるほどに、平家の軍兵、信頼・義朝の宿所をはじめて、謀叛の輩の家々にをよせく火を懸て焼拂ひ、
（頭注『半本「焼私ヒケリ」または内本「やきはらふ」に従うべきか。』）

一読して明らかのように、絵詞の具体性ある記述は、物語の頭の中だけででも書けるようなぬるま湯のような文にまさること数等であろう。勿論、逆にさきに言及を略した断簡部分につづく摸本の詞書では義朝のために防戦した五十余騎が敵と共に多く討死したという書き方にとどまらず、ここは大系本の方がかえって義朝の家来の固有名詞を列挙して具体的なのであるが、思うに絵巻は絵画を主とし、あまりにくだくだしい文章を添えることはその興味をそぐものであるから、ただ概括的・総合的の記述をもって換えたのかもしれない。

平治絵巻詞書と平治物語本文との間には、重要且つ少なからぬ異同が存することは、原本三巻の部分についてすでに国文学者も対校を行って論じているところであるが、いま原本断簡が一致することによって信憑性を加えた摸本六波羅合戦巻詞書の部分は、古典文学大系の校訂者もこ

れを用いるに及ばなかったにも拘らず、その異文の重要性は原本三巻の部分にまさるともおとらぬことがわかったのである。

以上の如く、私は六波羅合戦絵巻詞書断簡の紹介より、ひいて主として詞の書蹟の面から平治絵巻諸巻の成立問題に如何なる寄与をなすことができるか、試みにむこうみずの言をなしたのであるけれども、勿論正しい学説は一面の觀察のみで得られるべきものではなく、絵の面からの觀察その他と私の説が如何に調和するか、或いは矛盾するか、私は将来の検討の材料の一つを提供するにすぎない。ことに筆蹟の問題は字形の觀察のみをもつてたやすく結論を下すべきものではなく、墨色、紙質、その他の充分なる検討も要するのであるが、私はいまだこれを行なえないでいることをしるして、右の結論のみちびき方にはなお不足のあることを自からみとめざるを得ないのである。

註
—昭和四十二年度文部省科学研究費「古筆手鑑」の研究（各個研究）による—

（一） 心画帖は、昭和十四年八月本派本願寺発行の本を私も架蔵しているが、これより先明治二十三年九月本願寺内事局出版のものも有ることを知らなくてはならない。二本は収める所は全く同じで出入が無いけれども、比較対照すれば両者、版が別であることは明かである。題簽や表紙の布地が相異なることはさておき、中を見ても、昭和本はどのようにして版を作ったかはしらないが、明治版とは相当の隔がある。若干を指摘すれば、イ、明治版によると界蘭の施された切であるのに、昭和版では界蘭を写していないものがある。ロ、明治版に存する送假名が、昭和版ではぬけているものがある。ハ、明治版に見える濁点が、昭和版では見えなくなっているものがある。明治版にある朱点や黒点が、昭和版では落ちていたものがある。ニ、料紙の文様の写し方は、昭和版は明治版より略されてある。ホ、虫喰いの痕の写し方、明治版の方が昭和版より微細である。

へ、明治版では二色である文様が、昭和版では一色になっているようなものもある。
ト、料紙の地色や文様の彩色の色種・色調二版大分相違しているものがある。要するに、昭和版は明治版の模刻という程度である。昭和版に比べ明治版の方が、書についても色についても古雅の趣を存していることができるであろう。この心画帖について、このような手鑑が西本願寺にあったものをその形のまま複製したものであるか、または、一点一点の古筆断簡を集めて、このような帖に仕立てて出版したものであるか、そして、いまこの家隆筆古筆切の所在を尋ねたが、現在のところではまだわからないので、とりあえず図版には明治版の心画帖よりのせることとした。図版の寸法は心画帖と同じ。原物の寸法は心画帖にも注していないので不明であるが、絵巻他巻の例によると字面高四十匁位であろうか。

- (2) 秋山光和氏「平治物語絵六波羅合戦巻について」大和文華七号(昭和二十七年九月)
(3) 鈴木敬三氏「風俗からみた平治物語絵詞」国華七二七号(昭和二十七年十月)
(4) 奥平英雄氏『絵巻』平治物語絵巻―東京静嘉堂の項参照(美術出版社一九五七年)
(5) 足代弘訓の説は、婿の足代弘長が弘訓の説を筆記した足代寛居先生「丙午雜纂」の福嶋氏絵巻物の条にみえている。同書は東京大学史料編纂所に謄写されているが、2009/64―右の一条は信西の巻の伝来その他についても興味ある記述であるにもかかわらず、これまで美術史の方面でこれをあげていないのをみたことがないから、次に全文を掲げて参考にするとする。

「福嶋豊後末彦の家に信西法師の絵巻物あり畫は土佐光信の筆絵詞は後に絵巻物をきりて平治物語の文をかき入れたる物とみえたり上代やうの書にて定家やうと近衛やうを書ませたるやうなる書風也表装は嶋しゆすのやうなるものにて甚古色也御奉行渡邊下野守源輝朝臣二度御覽あり保科淡路守源正純朝臣の時江戸より御用のよしにて御召よせあり其後白川少將定信朝臣も御借覽の事あり近頃天保年中にも水戸中納言齊昭卿より御命にて御召よせあり摹写の御巻物の御出來のよし也」*

これによると、伊勢祠官福嶋家にあった信西巻について、弘訓はすでに絵と詞とは別と見、そしてその上代様の書風を定家様と近衛様をまぜた様な書風であるとしている。

*この模写がもしや水戸彰考館に存せぬかと思つて大正七年刊「彰考館圖書目録」をザッと検したところでは、これを見い出すことはできなかった。また「絵畫本目録稿上」別置貴重七類、絵畫、一卷子本、イ絵巻原本謄本(東京大學史料編纂所藏4180/812-1)

に『八六平治物語摹本三巻 縦一尺四寸 彩色 詞アリ 住吉慶恩筆平治物語絵巻粗寫ナリ 毎巻奥ニ筆者半隱ノ記アリ第三巻ナルハ
(八三五) (二六五五) (一六五八) (マ)
「天保六乙未年十一月十五日以住吉家藏明曆寫本うつしをはりぬ但源本は言葉書は絵の末にひとつにしてありしなりしかるをこたひ他の絵巻物のためしをもて所々にくはりぬ」賢木園主人(○内藤)広前 半隱「花廼家文庫」印』

の記載があり、これによると、住吉家藏の明曆寫本は詞書を絵の末に一つにまとめたものなのである。なお、これらの貴重な史料は、東京大学史料編纂所教授、太田晶二郎氏よりお教えをいただいた。何時も乍らの御好意に有難くお礼申し上げる。

(6) 註3所掲論文参照。

(7) 各巻の一行字数を算えてみると、

一、三条殿夜討巻は、

一行一六字の行が	三行	〳	一七字の行が	五行	〳	一八字の行が	七行
〳	一九字の行が	八行	〳	二〇字の行が	六行	〳	二一字の行が
〳	二二字の行が	なし	〳	二三字の行が	一行		

で、一行一九字の行が一番多く、平均では一行一八・七字である。

二、信西巻は、

一行一七字の行が	一行	〳	一八字の行が	七行
〳	一九字の行が	四行	〳	二〇字の行が
〳	二一字の行が	三行		

で、一行一八字の行が最も多いが、平均は一行一八・六字になる。以上二巻に比べ、

三、六波羅行幸巻では、

一行一七字の行が	一行	〳	一八字の行が	二行	〳	一九字の行が	四行
〳	二〇字の行が	一二行	〳	二一字の行が	四行	〳	二二字の行が
〳	二三字の行が	二行					

で、一行二〇字の行がきわだつて多く、平均も一行二〇・三字になる。(注意―右の統計には詞書各段の最後の行は加えないのである。それは、最後の行の文字は中途までで終つたり、少し余る文字も最後の行に詰め込んでしまつて普通より字数が多かつたりして、常態とはなし得ないから、これをばいいた。)なお、三巻いずれも字面の高さは大差はないのである。

(8) 「吉備大臣絵をめぐる覚え書―若狭所伝の三つの絵巻」美術研究二五三十五号、

昭和三十九年二冊、四〇年三月発行。

(9) 『倭にしき』に「ス慶恩 平治物語詞家隆卿 三巻」とある。

(10) 『住吉家鑑定控一』(美術研究三八號掲載)に「平治物語絵詞 第一 一軸 詞書 家隆卿 繪 住吉法眼慶恩筆 右眞跡無疑者也誠ニ稀世之珍宝殊勝之物御座候以上 寛政十戊午 五月廿五日(以下略ス)」とある。

(11) 文化版古筆名葉集の正三位家隆卿の条に巻物切絵詞書とあるが、これはこの平治の絵巻詞書を指したものと思われる。なお、平治絵巻の詞書の書によく似ているものに中院切(千載集)があり、古筆家において同じく家隆卿筆と極めていて、古筆家の鑑定も中々考慮に価するものがある。中院切は字形が平治詞書にまことによく似ていること等今後本絵巻の研究に資するところ少なくないと思う。また、図画考(斎藤彦麻呂著安政元年三月八七歿)にも住吉法眼慶恩の条に「平治物語三巻(詞家隆卿)」とみえる。ところで、考古画譜(黒川真頼全集本)下、ろ〔補〕六波羅行幸の条に、「松江侍従の許にて、古銅器及び古書画を見たり、(中畧)土佐光信筆、平治物語絵詞の零本六波羅行幸一巻、詞書は世尊寺行俊卿といへり」とあって、行幸の巻の詞書の筆者を世尊寺行俊と見る説もあつたようだ。

(12) この詞書と絵と同一紙である場合、その絵と同紙に書かれた詞書が絵と別紙に書かれた詞書と筆蹟が同一であるか別であるかは絵の製作年代の見解に重大な關係を及ぼすことは次のべる通りである。そこで読者並びに将来の研究者に特にこの点に留意比較をしていただきたいと思つてあとに掲げる書蹟対照表に於てこの書画同紙の分の文字は印を附することとする。また図版においても三条殿夜討巻、六波羅行幸巻については特に右のべた書画同紙の部分をかかげることとしたのである。ちなみに図版にかかげる信西の巻の詞書のうち最後の行の「無□ともいふはかりなし」の無の下の子を古くは瀧博士より今に至るまで「悲」と解読しているが、正しくは「暫」と読み仏教語からきた無慚の語と解すべきであらう。図版について字体をよくみられたいと思う。

(13) 次表において各字の下に数字がすなわち所在であつて、「三」は三条殿夜討巻、「信」は信西巻、「六」は六波羅行幸巻を意味し、次のローマ数字、アラビア数字は既掲の原本三巻文字対照表におけると同様、それぞれ段数・行数をしめす。但し、特殊の場合については挿図6の直後に*符注記を以て説明した。

平治絵巻六波羅合戦巻詞書の断簡について

鎌*	田*	兵衛・	申	三	七	け	三	七	殿	三	ハ	六	思	六	食	六	旨・
あ	六	三	一	三	一	三	一	三	六	一	三	六	一	三	六	一	三
り	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
て	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
ひ	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
か	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
せ	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
給	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
也	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
正	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
清	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
ハ	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
御	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
共	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
に	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
お	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
と	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
る	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
へ	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
か	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
ら	六	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
す	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
と	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
い	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
ひ	三	一	三	一	三	一	三	一	六	一	三	六	一	三	六	一	三
信	一																

(14) 鈴木敬三氏は三巻の年代差について(註3引用文献参照)、主として甲冑、鎧の武器、風俗の上から種々精査され、三条殿焼打・信西両巻を先ず弘安以前と見て差支えないとし、六波羅行幸巻は弘安以後永仁前後、六波羅合戦の巻は一層下つて元亨頃のものとなるであらうとされている。

(15) 但し、細かにいうと、(一)六波羅行幸巻の、詞書(第二段二分)と絵と併存の一紙の絵だけは成る程詞書同時のふるいものであるが、他の絵はそれとはちがつて新しいものである、或いはまた、(二)絵と同一紙に存する詞書のみは他の詞書と別筆の新しい筆蹟なのではないか、といわれるかもしれないが、それは一に書画いずれについても異筆同筆を鑑定する眼識にまたざるをえない。なお、(二)の考えは、夙に瀧精一氏が国華三二二号(大正6・3)「平治物語信西の巻に就て」の中でしめした見解が、これに一致している。もっとも瀧氏は別に絵が三巻の間で時代差があると言おうとして此の見解を示したわけではない。氏は絵は三巻同一筆と確かにいつている。ただ絵と詞書と同紙に存する場合の詞書が絵とごく接近して書かれたりして、あとから絵の紙に書き加えられたものであらうとの観察をのべたのである。

(16) 六波羅合戦絵巻模本写真については、角川版絵巻物全集IX「平治物語絵巻」参照。

(17) 原本が遺らぬ巻の詞書が写本によつてなりと、もっと有りはしないであらうか。私はこれについても探索を進めたいと思うが、塩竈神社蔵村井古殿奉納本の文学一七『絵詞』写本二冊は乾保元物語絵巻・坤平治物語絵巻であると史料編纂所に於て調査された由である。この本に是まで知られない平治詞書はないであらうか。なお又、保元物語絵巻というのが現存平治絵巻に並ぶような古本であるならば、新写であつても美術史学・国文学上に大きな発見といふべきであらう。

平治絵巻諸巻字体書風対照表

(仮名・漢字)

凡 例

一 表の中、仮名は五十音順とし、更に同音を表わす文字も字母の種類に従って区別して掲げる。字母別けの順序は、絵巻の中に出る回数が多い方を前にする。なお、一つの巻にしか見えない字体の仮名は、いま目的とする比較対照の材料とはならないけれども最後に一括して掲げておく。標目にかかげた字源の漢字は大体流布の説にしたがったのみで、必ずしも学術的に正確を期したものではない。

一 表の中、漢字は部首別にし、部首の中は楷書体の画数順に排列する。

一 漢字の表中の符号③は三条殿夜討巻、④は信西巻、⑤は六波羅行幸巻、⑥は六波羅合戦巻詞書をしめす。

一 表の中、文字の下に注する数字は追検に便するため、その文字の所在をしめすものである。ローマ数字は段をあらわし、アラビア数字は行をあらわす。たとえば、Ⅲ8は第三段の第八行にその字があるという意味になる。

一 *印の意味については本文の註12にのべた。

一 表における各字の大きさは原本に対し長さにおいて凡そ $\frac{1}{4}$ である。

一 原本では多く連綿体であるものをバラ／＼に切り出してしめすものであるから、一字一字の字体としては不自然の趣もあるのはやむをえない。またバラ／＼に切り出したため、文字のおき方が原本における状態と多少角度の異なる場合もあることを了承せられたい。

一 表の中の文字は、私がつたない影摹をこころみたものを用いる。影写ということは中々にむづかしいもので、三巻の特徴である顚筆など原本の筆意も未だ充分に伝えていないことを恐れるので、詳細の点については各字に注記した所在に従い、読者が複製本・写真等によって、したしく点検されることを希望する。(但し、信西の巻の日本美術同好

会―大正八年―の複製本は原本の倣を正確に伝えているとはいい難く、また考古学会複製本―明治四十四年―三巻中の三条殿夜討・信西の両巻は帝国図書館所蔵の摸本によったものであることを注意せられたい。

一 もと、漢字の対照表も仮名のそれと同様に所出の漢字全部を網羅し、又四段対照の形で作成したが、余りに膨大な紙幅を要するので、二巻以上に出る字を比較するのみに止めざるを得なかった。一つの巻にしか出ず、それ全体としては比較の用に役立たない文字も、例えば同じ偏の字は他巻にもみられて、偏の方だけなら比較の材料となったりすることもあるので、簡略にしたのは遺憾であるが已むを得ない。

◇ 見からきた「み」の字は、それが目でみるの意に用いられた時、本字と解釈すべきか仮名とするべきか中々区別がつきにくいので、いま便宜先行する表である一の仮名の表にいられておくこととした。

◇ 六波羅の羅の字はやかましくいえば本字であるけれども、その草体が仮名の場合とはほとんど同一であるから比較材料をますために仮名表に併合した。

◇ 覧は本字として用いたものではなく、助動詞らんを表わす仮名的用法のものであるから仮名の表に入れた。

† ここに示した平治絵巻内部の諸巻の字体・書風の対照は、更に外部の他の絵巻の詞書文字・書風とも対照してこそはじめて真の確かな意味をもつこととなるものである。その目的で、ほぼ同時代と思われる代表的絵巻の字体・書風をしめす参考欄をも次の表の下部に附しようとしたが、これまた紙幅の増大を恐れて省略したのは、学術的良心の苛責を感じるところである。

五十音	安	以	宇	於	可	幾	起	久	氣	遣	計	希	个	己	左
三	あ	い	う	お	う	き	け	く	き	け	け	け	け	け	け
条	わ	い	う	わ	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
殿	あ*	い	う	わ	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
夜	わ*	い	う	わ	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
討	あ	い	う	わ	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
卷	あ	い	う	わ	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
信	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
西	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
卷	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
六	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
波	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
羅	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
行	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
幸	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
卷	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
断	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き
簡	あ	い	う	お	う	き	き	く	き	き	き	き	き	き	き

二五

五十音	之 佐															志 春 寸 須 勢 世 世 曾 多 堂 太 知 川 川 旦														
三 条 殿 夜 討 卷	121	13	116	127	122	14	125	19	16	112	17	17	112	13	114	14	14	15	12											
	125	14	117	129	124	15	19	113	117	125	112	113	116	116	114	118	118	113	14											
	15	15	119	115	127	110	122	117	128	120	113	116	119	119	120	116	116	116	15											
	110	110	119	119	129	111	117	117	122	120	112	116	119	119	128	119	119	119	16											
	111	111	123	123	112	119	120	117	128	120	112	116	119	119	128	119	119	119	16											
	111	111	123	123	112	119	120	117	128	120	112	116	119	119	128	119	119	119	19											
	116	116	125	125	116	124	124	117	122	120	113	116	119	119	120	116	116	116	111											
信 西 卷	14	11	11	11	18	13					114	12	15	15	13				13											
	15	15	112	112	112	112					112	19	112	12	12				17											
	17	17	116	116	114	114					112	112	12	12	12				18											
	18	18									112	112	12	12	12				110											
	110	110									112	112	12	12	12				110											
六 波 羅 行 幸 卷	121	12	113	126	111	14	16	15	13	112	115	13	12	12	112	12	12	13	12											
	123	14	115	127	110	15	17	12	15	112	112	14	13	14	112	14	14	16	13											
	125	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	19	15											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14		15											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	111	15											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	112	17											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	112	17											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	112	17											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	112	18											
	128	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	112	18											
断 簡	121	12	113	126	111	14	16	15	13	112	115	13	12	12	112	12	12	13	12											
	123	14	115	127	110	15	17	12	15	112	112	14	13	14	112	14	14	16	13											
	125	18	111	127	110	15	111	14	15	112	112	14	13	14	112	14	14	19	15											

者 乃 乃 能 祢 奴 仁 尔										尔 那 奈 奈 止 天									
る	の	乃	れ		ぬ	に*	ふ	る	る	れ	な*	あ	と*	さ	と	て	る	る	
11	121	11	13		126	113	11	122	15	17	112	14	115	120	14	12	125	115	
る	の	乃	れ		ぬ*		ふ	る	る		な*	あ		さ	と	て	る	る	
14	123	18	120		115		15	124	16		115	16		123	17	19	125	117	
る		乃	れ	祢			ふ	る	る			あ		と	と	て	る*	る	
19		112	126	121			110	129	110			111		126	18	116	112	120	
る		乃	れ				ふ	る	る			あ		さ	と	て	る*	る	
122		119	128				120	129	111			123		126	19	118	114	121	
る		乃	れ				ふ	る*	る			あ		と	と	て	る		
123		121	128				125	111	116			126		129	110	127		122	
る		乃	れ				ふ*	る*	る			あ*		と	と	て*	る		
127		126	129				113	115	118			113		129	111	113		124	
る*		乃*	れ*				ふ*	る				あ*		と*	と		る		
113		111	112				115	122				115		112	112			125	
る	の	乃	れ	ぬ		に	ふ	る	る	な	あ	さ	さ	て			る		
116	112	18	111	14		11	13	15		11	12	16	12	18			110		
		乃	れ				ふ	る	る	な	あ	さ	さ	て			る		
		115	111				13	15		13	13	17	12	112			112		
		乃	れ				ふ	る	る	な	あ	さ	さ				る		
		115	113				17	111		15	14	113	13				112		
			れ				あ	る	る	な	あ	さ	さ				る		
			115				18	113		16	116	115	14				112		
							ふ	る				さ	さ				る		
							114	114				116	14				112		
る	の	乃	れ	ぬ	ぬ		ふ	る	る	ぬ	な	あ	あ	と	と	さ	て	る	る
14	119	13	11	113	117		13	110	18	113	11	118	12	118	112	14	11	113	18
る	の	乃	れ		ぬ		あ	る	る	な*	あ	あ	と	と	と	て	る	る	
17	110	15	16		119		17	19		112	119	16	119	112	14	13	114	110	
る		乃	れ		ぬ		あ	る	る	な	あ	あ	と	と	と	て	る	る	
18		16	17		110		18	113		112	111	114	110	112	16	17	114	112	
る		乃	れ				ふ	る	る	な	あ*	あ	と	と	と	て	る	る	
113		114	114				19	115		110	111	110	110	113	16	19	117	112	
る		乃	れ			「	ふ	る	る		あ	あ	と	と	と	て	る	る	
113		115	114			11	113	111			111	110	110	114	18	111	111	113	
る		乃	れ			「	ふ	あ	る		あ	あ	と	と	と	て		る	
114		111	115			11	113	118			116		117	110	110	112		113	
る		乃	れ	れ			ふ	ふ	る		あ	あ	と	と	と	て	「	る	
113		111	117	111		119	111	118			117		117	111	111	114	119	111	
る		乃						る					と	と			る		
る																			

28

遠 和 禮 礼				礼 留 累				留 里		利 羅		良 与		也 毛		茂 毛	
を ₁₂	わ ₁₅	禮 ₁₄	れ ₁₂₂	れ ₁₃	ゑ ₁₂₂	ふ ₁₇	う* ₁₁₃	ろ ₁₃	里 ₁₁	わ ₁₂₇	わ ₁₃	ら ₁₆	よ ₁₃	や ₁₉	り ₁₁₉	茂 ₁₅	毛 ₁₈
を ₁₃	わ ₁₁₆	禮 ₁₁₉		れ ₁₅		ふ ₁₂₀	う* ₁₁₃	ろ ₁₅	里 ₁₈	り* ₁₁₃	わ ₁₁₂	ら ₁₁₁	よ ₁₉	や ₁₁₉	り ₁₂₆	茂 ₁₉	毛 ₁₉
を ₁₅	わ ₁₂₁			れ ₁₁₁		ふ ₁₂₈	う* ₁₁₅	ろ ₁₈	里 ₁₁₇	り* ₁₁₅	わ ₁₁₂	ら ₁₁₂	よ ₁₁₁			茂 ₁₂₆	毛 ₁₁₂
を ₁₆				れ ₁₂₂				ろ ₁₁₃	里 ₁₂₃		わ ₁₁₂	ら ₁₁₇	よ ₁₁₂			茂* ₁₁₄	毛 ₁₁₉
を ₁₈				れ ₁₂₇				ろ ₁₁₆	里 ₁₂₆		わ ₁₁₂	ら ₁₁₇	よ ₁₁₃			茂 ₁₂₅	毛 ₁₁₉
を ₁₉								ろ ₁₁₉	里 ₁₂₇	里* ₁₁₄	わ ₁₂₂	ら ₁₂₁	よ ₁₂₇			茂 ₁₂₆	毛 ₁₂₃
を ₁₁₀								ろ ₁₂₀	里* ₁₁₃	里* ₁₁₅	わ ₁₂₆	ら ₁₂₈	よ ₁₂₄			茂* ₁₁₄	毛 ₁₂₃
を ₁₂	わ ₁₁₂	禮 ₁₄	れ ₁₂	れ ₁₂	ゑ ₁₁₄	ふ ₁₅	う ₁₁	里 ₁₁	わ ₁₂	羅 ₁₁₄	ら ₁₃	よ ₁₁₁	や ₁₆	り ₁₄	茂 ₁₂	毛 ₁₂	
を ₁₄			れ ₁₆			ふ ₁₁₄	う ₁₉	里 ₁₂	わ ₁₂		ら ₁₅				茂 ₁₆	毛 ₁₃	
を ₁₅			れ ₁₉				う ₁₁₃	里 ₁₄	わ ₁₃		ら ₁₁₄					毛 ₁₃	
を ₁₆							う ₁₁₃	里 ₁₈							茂 ₁₁₄	毛 ₁₄	
を ₁₇								里 ₁₉	里 ₁₁₆						茂 ₁₁₆	毛 ₁₇	
を ₁₁	わ ₁₁₀	れ ₁₈	れ ₁₁₆	れ ₁₆	ゑ ₁₈	ふ ₁₂	う ₁₁₃	う ₁₁	里 ₁₁₀	わ ₁₁₁	り ₁₁	羅 ₁₁	ら ₁₂	う* ₁₁₁	や ₁₁₁	り ₁₆	茂 ₁₃
を ₁₂	わ ₁₁₈	れ ₁₁₄	れ ₁₁₃	れ ₁₉	ゑ ₁₁₄	ふ ₁₁₂	う ₁₁₁	う ₁₂	里* ₁₁₁	り ₁₁₃	わ ₁₂	羅 ₁₅	ら ₁₆	よ ₁₁₃	や ₁₁₉	り ₁₈	茂 ₁₄
を ₁₃		れ ₁₁₃	れ ₁₉		ふ ₁₁₃	う ₁₁₃	う ₁₃	う ₁₃	里 ₁₁₂	わ ₁₁₂	り ₁₇	羅* ₁₁₂	ら ₁₁₉	よ ₁₁₃		茂 ₁₁₆	
を ₁₄		れ ₁₁₆	れ ₁₁₀		ふ ₁₁₈		う ₁₁₄	う ₁₄	里 ₁₁₄	り ₁₁₃	わ ₁₁₉	羅 ₁₁₁	ら* ₁₁₂	よ ₁₁₇		茂 ₁₁₉	
を ₁₇		れ ₁₁₉	れ ₁₁₀				う ₁₁₅	う ₁₁₆	里 ₁₁₅	わ ₁₁₅	り ₁₁₅	羅 ₁₁₂	ら ₁₁₁			茂 ₁₁₅	
を ₁₇		れ ₁₁₁₀	れ ₁₁₄				う ₁₁₉	里 ₁₁₁₀	わ ₁₁₇	り ₁₁₅	わ ₁₁₅	羅 ₁₁₂	ら ₁₁₄		茂 ₁₁₉	毛 ₁₁₅	
を ₁₁₀			れ ₁₁₆				う ₁₁₁	里 ₁₁₁₀	わ ₁₁₉	り ₁₁₁	わ ₁₁₁	羅 ₁₁₉	ら ₁₁₉		茂 ₁₁₁₀	毛 ₁₁₆	
				ふ				う		里		ら		よ			

1110

VI	〔厂部〕 原 信 原 Ⅲ 1 断 原	〔人部〕 参 三 春 12 春 128 六 春 Ⅲ 2 春 Ⅲ 5	〔口部〕 同 三 因 Ⅱ 1 因 Ⅱ 2 命 三 命 123 信 命 16
II 1	〔六部〕 刻 Ⅱ 1 前 三 第 114 信 第 19 第 Ⅲ 5	〔匕部〕 北 信 小 18 六 小 13	〔口部〕 卿 六 卿 11 卿 113 卿 127 六 卿 15 卿 Ⅲ 2 卿 Ⅲ 4 卿 Ⅲ 4
II 2	〔六部〕 冬 Ⅱ 4 六 冬 114 冬 Ⅳ 3 断 冬 Ⅲ 4	〔口部〕 出 三 出 Ⅱ 3 信 出 17 出 19 出 110 六 出 110	〔刀部〕 切 三 切 119 信 切 110 刻 三 刻 11 刻 Ⅲ 1
IV 1	〔八部〕 公 三 公 127 六 公 Ⅲ 2 公 Ⅲ 4	〔儿部〕 光 三 光 114 无 117 无 19 无 Ⅱ 1	〔入部〕 内 三 内 115 内 126 六 内 110 内 Ⅲ 4
IV 2	候 三 候 14 候 15 候 16 候 17 六 候 113	〔信部〕 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
III 1	〔一部〕 七 信 七 14 七 Ⅲ 1 六 七 Ⅱ 1 三 三 12 三 124 三 Ⅱ 2 信 三 14 三 Ⅲ 1 上 三 17 上 112 上 120 上 128 信 上 15 六 上 11 上 110	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔一部〕 中 三 中 125 中 Ⅲ 4 中 Ⅲ 4 中 Ⅲ 5 中 129 中 Ⅲ 5 中 14 中 Ⅲ 5 六
III 2	下 三 个 111 个 120 个 Ⅱ 3 信 个 Ⅲ 1 六 个 114 个 Ⅲ 4 个 Ⅲ 5	〔丁部〕 事 三 事 16 事 17 事 129 事 Ⅲ 5 事 14 事 Ⅲ 5 六	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 今 三 今 110 信 今 16 今 Ⅲ 5 何 三
III 3	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
III 4	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
III 5	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 3	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 4	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 5	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 6	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 7	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 8	〔乙部〕 也 六 也 15 断 也 Ⅲ 1 六 也 114 也 Ⅲ 4 也 Ⅲ 5	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4	〔信部〕 信 17 信 Ⅲ 5 来 三 来 14 来 Ⅲ 4 信 来 110 信 来 Ⅱ 1 信 三 信 11 信 12 信 18 信 19 信 113 信 Ⅱ 1 信 11 信 111 信 112 信 Ⅲ 2 六 信 Ⅲ 4
IV 9	〔乙部〕 也		

三三

31